

イスタンブールの不思議な文化感覚（1996年）

1453年5月29日、コンスタンチノーブルはメフメトII世率いるオスマントルコ軍に攻め入られ、1000年続いたビザンチン帝国が滅んだ。爾来この街はイスタンブールという魅力的な名前に改められ、東西文化の接点として世界の一つの中心であり続けている。IASS会議のためにイスタンブールを訪れた折、ボスフォラス海峡に面したルメリヒサーリという要塞跡（1452年、コンスタンチノーブル攻略の為にメフメトII世がわずか4ヶ月で完成した）に立って、ヨーロッパとアジアの両方を一度に感ずるといふ奇妙な感慨を持ったことがある。生活文化の面から見ると、ヨーロッパの文化は静寂、対称、持続、堅牢であるのに対して、アジアのそれは喧噪、非対称、更新、簡易であると言われる。イスタンブールはこれらのすべてが含まれる不思議な文化を持っている。この街に数日いれば、われわれ日本人は妙になじむようで、しかしどこか落ちつかない感覚を抱くことになる。

和辻哲郎は名著「風土」の中で、人間存在（すなわち文化）の構造契機としての風土性を、アジアのモンスーン型とヨーロッパの牧場型、中央アジアの砂漠型の3つに類型化した。実に明快な論旨で、建築についてもそっくり当てはまるような分類になっている。特に風土性を「自然の暴威」との関わりにおいた視点があざやかである。風土性はすべて湿潤と乾燥という気象作用に起因する。イスタンブールの妙な感覚とは多分3つの類型をすべてごちゃ混ぜにしたものだったからだろう。つまり歴史的に東西の接点になっているだけでなく、地理的にも気候条件としても東西融合の文化を持っている。

ところで風土性が自然の暴威に律せられるとすれば、われわれ日本人にとって風土要因の際たるものは「地震」であろう。湿潤と乾燥はいわば日常的な気象作用であり、確かに文化のあり方を規定する要因に違いない。それに対して、地震は少なくとも百年あるいは千年の単位で捉えるべき自然の暴威であるものの、歴史に支えられた都市や建築、人間生活のすべてを元も子もなくしてしまうほどのパワーを持っている。鴨長明の「方丈記」には地震におののく京都が生き生きと描かれていて、筆者の無常感の一因となっているし、草庵を営むいじらしい生活態度がわれわれの胸を打つ。ここに日本文化の奔流を読みとることができるのではないだろうか。

地震は日本独特のものではない。ヨーロッパに衝撃を与えたりスボン大地震は1755年のできごとであるが、これを契機として時の大思想家ボルテールは「カンディード」を著し、自立する市民の思想への変革を遂げたといわれる。ボルテールの思想はフランス革命への引き金にもなった。そうなる地震という自然現象の計り知れない暴威が、たとえ千年単位のイベントであろうと、真剣に取り組むべき対象であることに違いない。ポルトガルに限らず、ギリシャやトルコの位置する地中海地方も地震地帯である。イスタンブールで感じた不思議な文化感覚は、地震という共通風土に根ざしているのにちがいない。

（鉄鋼技術1996年6月号に掲載）再構成2015年5月

イスタンブール印象記 (1993年)

檜原 健一



■ イスタンブールの地理と風土と歴史

イスタンブールは地理的にも歴史的にも、際立った特徴を持っている。先ず地理的には次のような所である

- ヨーロッパとアジアの接点。北側は黒海、南側はマルマラ海。イスタンブールはボスフォラス海峡によってヨーロッパサイドとアジアサイドに分かれ、二つの大橋で結ばれている。
- さらにヨーロッパサイドは金角湾 (GOLDEN HORN) によって旧市街と新市街に分かれ、二つの橋 (ガラタ橋とアタチュルク橋) で結ばれている。
- 旧市街の西端は、コンスタンチノーブル時代に築かれた城壁が今も残っている。

歴史的には以下のような特徴がある。

- 古代ギリシャの時代から都市として存在し、東西交流の接点として機能した。
- アレキサンダー大王の東征、モンゴル民族の西征で通過地点となった。
- ビザンチウム→コンスタンチノーブル→イスタンブールと変遷した。
- 東ローマ帝国の首都 (ギリシャ聖教) として1000年。
- オスマントルコ帝国の首都 (イスラム教) として500年。

こんなことはどこのガイドブックにも書いてある。ただイスタンブールのすごさというのは、これらの事柄が今でも確実に実感できることだ。ロンドンでもパリでもローマでも確かに歴史の重みがあって、多くの遺跡や歴史的建造物が魅力的な形で残っているが、常に都市計画が実行されていて改造が進んでいる。しかしイスタンブールに來れば、そんな改造は論外なのだ。つまりここでは15世紀以来、完全に時間が止まっているみたいだ。

イスタンブールに來て市域のほとんどを歩きまわり、おおまかに以下の特徴がわかった。

1. ボスフォラス海峡沿いの地域で第一大橋と第二大橋の間がリゾート地として機能、景観がよい。
2. 住宅はほとんどヨーロッパサイドの新市街北側とアジアサイドにあり、そこには近代的なアパートが多い。

3. 全般にイスタンブールはとても埃っぽい。喉の弱い観光客はすぐに扁桃腺がはれてしまうらしい
4. 気候はとても温暖で、風が心地よい。湿度は低いので、日影が涼しい。日中は晴天が続き、ほとんど半袖で過ごした。



イスタンブールの町並み

埃っぽいというのはイスタンブールの際立った特徴である。だいたい街の清掃をしているところには一度も見かけなかったし、舗装のしていない所が多いのだ。旧市街はほとんど石畳で、その目地に詰まっている土がよく舞い上がる。車は排気ガスがすごい。ただしイスタンブールの名誉のために弁護すると、蠅や変な虫は見かけなかったのも、衛生状態は意外と良いのではないかと思う。

■ 人と生活に関する印象

ローマからイスタンブールに着いたとき、空港に沢山の人がいた。時間は夜の九時頃なのにずいぶん多くの出迎えの人がいるものと思ったのだ。しかしそれはガイドのヌーライさんの説明で間違っていることがわかった。ヌーライさんはトルコ人だがとても日本が好きで東京に何年か留学していたという主婦である。かなり日本語が上手で、翌日の午前中もガイドを務めてくれた。そのヌーライさんが空港からホテルまでの40分ぐらいでざっと次のように説明してくれた。

- ・イスタンブールの人口は、約1200万人。サラリーマンの平均月収は二万円程度。失業率は高く十五パーセントぐらい。街には浮浪者がいやというほどいる。しかし物乞いやかつぱらいなど悪い人はいない。
- ・通貨はトルコリラ。1993年5月現在、1トルコリラ=0.01円。
- ・インフレが激しく、年間74パーセントも物価が上がっている。だから現地以外ではトルコリラをどこも扱っていない。買い物ではアメリカドルが通じる。1ドル=10000トルコリラ。
- ・いろんな民族が混じっていて、目や髪の色がいろいろある。男性はたいてい髭を生やしている。ギリシャ系の顔立ちが多かった。女性は美人が多い。イスラムの信心があつい女性は頭からスカーフをかぶっている。しかしその数はあまり多くなく10パーセントぐらい。

つまり、あの空港にたむろしていた人たちはほとんど用のない人たちだったのだ。そういえばイスタンブールにはひまな人が多いらしく、少し休んでいると必ず声をかけてきた。道に迷った様子だと必ず教える。しかし何をいつているかさっぱり分からない。英語はほとんど通じない。それでも一生懸命に教えてくれる。トルコ人は親切なのか、それともおせっかいなのか。広場なんかには平日の真昼間にいる人のほとんどが失業者らしい。なにかすれば腹が減るからじっとしているのだろう。しかし彼らはことが起きればすぐに集まってくる。

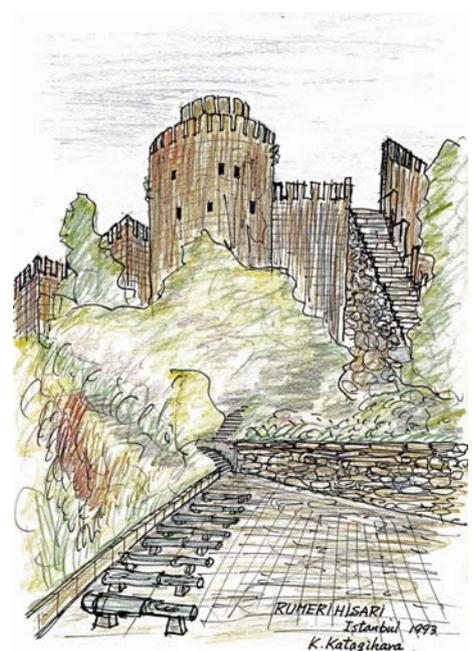
スケッチをしていると、必ず誰かが親しげに寄ってきて何かいう。黙ってみているのではなく必ず会話を求める。これには閉口したものだ。イスタンブール大学の前でコーラを飲みながらスケッチしていた時など、老人が手品をして僕にやって見ろという。そこに子供が入ってきて、何か叫ぶ。さらにいろいろな人が集まってきて收拾がつかなくなる。そんなわけでイスタンブールのスケッチはすべて途中で終わっている。しかしそういう人なつこしさがたまらなく嬉しくもあった。このことはきっとイスタンブールの歴史に起因するのだろうとも思う。



イスタンブールの愛すべき子供たち

このトルコ人（あるいはイスタンブール人）の性癖は、子供たちにおいてはもっと極端で、しかしとてもかわいい。カメラを向けるとみんな寄ってくる。そして「アドレス！」と叫んで住所を書く。写真を送れといっているのだ。トプカピ宮殿には日曜日に行ったが、なぜか子供達の団体が多かった。時折ベンチに腰掛けてタバコをふかしていた時にたくさんの子供達から声をかけられた。彼らはくったくない笑顔をして寄ってくる。そんなに日本人が珍しいのだろうか。いやそれともこちらの格好がおかしかったのだろうか、あるいはどこからきたのかわからないのか、いまでも謎だ。そういえば思い当たるふしがある。ぼくなんか典型的な日本人の体型であるにもかかわらず、イタリアノ、メキシカン、アルゼンチーノといわれて、「ジャポネ」といっているのになかなか信じてもらえない。しかし立ち上がったぼくを見て、「オオー、ジャポネ！」とはさすがに観光地の子供たちだ。

ルメーリ・ヒサーリという昔の要塞がある。新市街の北端、第二ボスフォラス大橋の近くだ。トプカピ宮殿の後、タクシーでそこまで見物に出かけた。ここまで来ればさすがに人も少なく、ぼくは快適な木陰でスケッチをしていた。二十分ぐらいいは誰にもじゃまをされなかった。とても気持ち良かった。ところが安心は禁物である。子供が二人寄ってきて何か話しかけてきた。僕は軽く笑って愛想を振りまいてから、また描き始めた。その愛想がいけなかった。色鉛筆を出して塗り出すと「オオーッ」という。そうこうしている内に、たちまち30人ぐらいの小学生が集まってきた。まだ絵は完成していない。彼らは僕の肩や顔にさわったりする。よく見ると子供達はいろんな顔立ちをしている。髪の色も黒や茶や金髪がある。もう僕はスケッチの方はあきらめざるをえなかった。そして一緒に写真を撮ろうということになった。そこへどうやら引率らしき先生がやってきた。彼もきっちり写真におさまったのがなんだかおかしい。そのあと先生は学校の住所を書いてくれた。



ルメーリ・ヒサーリ

この一件は、イスタンブールにおける小学生の野外教育であると理解するべきなのだろうか。

■ グランドバザール

イスタンブールは商人の街である。働いている人といえばものを売っている人だけのような街である。露天でいろんなものを売っている。主に食料品だがとにかく豊富な食料品があることは確かだ。埃っぽいところでもにぎやかな露天が出ていて、見ているだけで楽しくなり、つい写真を撮ってしまうことがしばしばあった。

グランドバザールには建築的な興味もあって滞在中に何度か通った。メインの通路があって、そこから枝のようにいろんな通路がでていく。しかしそれらはすべて曲がっていて、迷路のようだ。それにとにかく人が多い。



グランドバザール

内部通路は天井がポルトになっていて、とても魅力的だ。店は貴金属商、絨毯屋、シャツ屋、そして皮製品屋である。同じような店が幾つもある。歩いている人は多いが、買っている人は少ない。Tシャツを買った時、向こうは一枚6ドルといった。こちらは5ドルだといってねばったが、結局5.5ドルに落ちついた。通路には呼び込みの店員が多く、日本語で「こんにちは。じゅうたんどうですか」といつてくる商人がいた。

最初の日にバザール近くの絨毯屋にヌーライさんの勧めで入り、絨毯の売り込みを聞いた。三十分くらい続いたがとても面白かった。そこは日本の商社が取引しているらしく、ものは確かであるといった。リンゴ茶をよばれながら、流暢な日本語でトルコ絨毯のプレゼンテーションを聞いていると、どうしても買いたくなってくる。結局買うのはやめたがヘレケの最高級品をみせられ、「一人の乙女が18才から23才までの5年をかけて、いわばその青春をそそぎ込んだ2×3メートルのすばらしい絨毯はどうですか？ あなたには特別のともだち価格で」なんて言われると、つついその気になってしまいそうなのだ。

■ 交通について

市電、市バス、乗合バス、タクシーと交通機関には不自由しなかった。特にタクシーはどこでも拾うことができ、しかも安い。市電や市バスは4000トルコリラなので40円、乗合バスは低所得者が多くらしく20円と安い。距離は関係ない。ただバスは乗り場がはっきり決まっておらず、うまく乗るのに苦労した。一度乗ってしまえば、運転手におりたい所を伝えれば、その場所に到着したときに教えてくれる。言葉がほとんど通じないので地図が必携である。

旧市街の中心はどうやらグランドバザールのあたりらしい（ベヤジット地区）。ここには大きな教会もあり、しょっちゅうイスラムのお教がマイクを通して流れていた。何度もベヤジットを起点として行動した。バスターミナルもあり、とにかく人の多いところだった。

タクシーは市内なら大体数百円で足りる。3時間借り切って市の北部（ボスフォラス海岸）を回ったときは8000円だった（乗る前にヌーライさんがが交渉してくれた）。タクシーに乗っても運転手は親切にガイドをしてくれるが、何を言っているのかよくわからない。タクシーはとてもきれいで（ほとんどベント）、ニューヨークなんかと比べものにならないほどに清潔である。

イスタンブールは三つの地域が海で仕切られている。だから通勤のための都市内での移動に船を利用する人が多いようで、朝や夕方はフェリーの発着場に多くの人ともの売りがいた。



イスタンブールの市電

■ 食事のこと

来るまでは食べることにについて心配だった。トルコの料理といえば「シシカバブ」しか知らなかったし、思い通りの食事ができるなど期待していたわけではない。とはいえ郷に入れば郷に従えというわけで、彼の地の食べ物、それもごく一般的な庶民の食事につき合わざるをえない。食事代は、昼食で500円～1000円程度、夕食で2000円程度（飲物を含む）と少し高めだ。しかしこれが意外とおいしいのに感心した。

昼食はほとんどトルコライスというやつだった。豆ご飯をバターで炒めたピラフでなかなかおいしい。マッシュルームポテトが添えてあってでんぶん質ばかりだが、日本人にとってはなじみの味だ。ヌーライさんの話では、当地の人たちの標準的な食事らしい。その上にカバブのそいだやつをいっぱい乗せたものも食べたが、これがまた実にうまい。トルコライスのグラタンも一度食べた。上品な味だった。

夜は肉料理かシーフード。肉はたいてい羊だ。なかでもハンバーグのようなのが食べやすかった。シーフードは少し大味でおいしくはない。ヨーロッパではいつもシーフードにばかりする。

デザートは甘いものが豊富で、ライスプリンやリンゴ菓子など蜂蜜がたっぷり乗っている。しかしなんととってもアイスクリームが最高。蜂蜜が入っているらしく、粘り気がある。

トルコで飲んだビールはピルセン。軽くて飲みやすい。一度夕食時に「ラク」という酒を飲んだ。水で薄めて飲むのだが、とてもきつくてまいった。コーヒーは小さなカップに入ったトルココーヒー。上の半分くらいしか飲めない。ミルクをいれないととても飲めたものではない。日本で飲むコーヒーと同じものなら、「ネスカフェ」という。まちの喫茶店（チャイハネ）では、たいていの人がガラスの小さなカップに入れた「APPLE TEA」をのんでいる。これはおいしい。

というわけで心配していた食事には全然困らないどころか、かえってファンになってしまった。ただチャイハネや夜のレストランでは、たいてい席がああ埃っぽい外部に出ているので、ざらざらしたテールクロスには閉口した。

■ イスタンブールの教会建築

さて肝心の建築のことだ。すでにイスタンブールの建築については多くの本があって、有名な建築家ではル・コルビジェ「東方への旅」とか、安藤忠雄「旅」なんかを見ると、いずれも相当な刺激を受けているらしいことがわかる。また建築関係の雑誌でも特集が組まれていて情報には事欠かない。それでも実際に見た印象はやはり強烈で、古代ギリシャ・ローマと、キリスト教とイスラム教が不思議に混ざりあって、イスタンブール特有の都市景観を生み出していることが納得できる。現地でとらえた特徴を列挙すれば、

- ・イスタンブールには教会（トルコ語でジャーミー）が2600もあるという。どこを向いてもモスクとミナレットが目に入る。
- ・教会や一般の建物を特徴づけるのは、ドームとアーチの曲線である。
- ・近くで見るとそれほどきれいではないが、遠くから見たときの町並みはすばらしい。民家の屋根が赤い瓦で連なり、そこに緑に囲まれた教会のドームやミナレットが組み合わさると、奇妙にバランスのとれた景観になる。
- ・新市街の建物はほとんど2階以上が張り出している。だから歩道の端部分はアーケード付きのようになっている。

教会建築がイスタンブールの観光スポットになっているのだが、3カ所しか見ていない。ブルーモスク（スルタン・アーメッド・ジャーミー）、ハギヤ・ソフィア、そしてカーリエ・モスクである。後の二つは元々キリスト教の教会であったのを、トルコがイスタンブールを占領した時にイスラム教会に改造したらしく、きれいなモザイクの上にモルタルを塗りたくったが、第二次大戦後にトルコの民主化に伴って元にもどされつつある。カーリエモスクやハギヤ・ソフィアではよく教科書に出てくるモザイク画があって、「ああなるほど」とうなずいている人が多かった。実際、見物客はヨーロッパ人の団体が多く、フランス語やドイツ語がモスクの中を飛び交っていた。



ハギヤ・ソフィア

ブルーモスクは名前の通り、内部の壁に貼りつめられたブルーのタイルがきれいだった。セビリヤで見たのと同じだ。このタイルはあまりにも見事だったのでどこかで売って買っただろうかと思っただけだ。お祈りの最中にタイルが落下したことは無いのだろうか？ しかしなんと言っても、床に敷き詰められたトルコ絨毯の立派なこと、ちょうど一人が寝転んでいっぱいになる程度の畳一枚分の大きさ。これで納得した！ トルコ絨毯はアラーにお祈りするための聖なる敷物であるのだ。



ブルーモスクの絨毯

モスクの建築的な最大の特徴は、複雑なドーム構造である。いくつもの球形ドームが重なりあって最小限の柱で支えている。この構造システムは造形的にも魅力がある。

■ 観光スポット (一) 地下宮殿と考古学博物館

イスタンブールへ来た人は必ずトプカピ宮殿やモスクなどを見物しているようだが、通常の観光ルートには入っていない所のことを書きとめておこう。

第一には地下宮殿と呼ばれている貯水場跡である。ハギヤソフィアの近くにあるが、入り口がとてもわかりにくい所にある。看板なんか無いので(あったとしても字が読めないが)、よく調べないとわからない。一人で電車道に沿ってぶらついている時に、偶然その出口に入った。すると守衛のおじさんらしき人が何やら叫んで来る。ここは入り口でないと断言しているらしい。地下宮殿のことを知ったのは、007シリーズの映画の第一作目だったように記憶している。ジェームス・ボンドがロシア側の敵と渡り合う場面に使われていた。その時こうもりが飛んでいて、ずいぶん気味の悪い所だった。しかし、これがユスチニアヌス皇帝の築いた貯水場だと知ってから、がぜん訪ねてみたくなった。なんとか入り口を捜し当てて中に入ると、もうほとんど暗闇で何も見えない。時々上の方からポタポタとしずくが落ちてきて、とても冷たい。そのうち目が慣れてきてよく見ると、石造の柱が規則正しく並んでいて、上部は交差アーチになっていた。他に観光客はほとんどいなかった。見学用の通路があって、その一番奥に人の顔を横に向けたり、逆さに向けたりした柱脚部を持つ柱があった。柱はほとんど大理石でできていて、多くは縦方向にひび割れが入っている。その補強のためだろう。スチールのバンドがタガのように巻いてあった。よく考えればすでに1500年ぐらい経っているのだ。いつ壊れてもおかしくない。



地下宮殿 (入場チケット)

考古学博物館という施設がトプカピ宮殿の近くにある。ここもあまり観光客は来ないようだ。でも何かの本で、イスタンブールでここだけは見逃さないように書いてあった。なぜならここにはアレキサンダー大王の胸像や棺があって、それは素晴らしいものであるという事だ。どうせ時間はあるのだから、地図を頼りにかなりの回り道をしながら行った。そしてこの博物館は非常に大きくて、すごいコレクションを持っていることがわかった。考古学に興味は無いけれど、アレキサンダー大王のことには関心がある。紀元前、イスタンブールはビザンチンというギリシャの植民都市であり、アレキサンダーが東征したときこの町を通ったのだろう。そして志半ばで彼は亡くなったのだが、アレキサンダーに関係した遺物がかなりここに保存されている。総大理石の棺は



アレキサンダー大王の棺

総大理石の棺は

実に立派なので写真を撮ろうとしたら、守衛が小さな声で一分待てという。そして他の客には写真はダメだと追い払っていた。しばらくして人がいなくなったとき、OKといたのでシャッターを切った。そして守衛は僕に言った。「一ドルよこせ」と。たぶんこの守衛はこれで結構稼いでいるのだろう。

この博物館は他にも建物があって、タイル展示館も横にある。中の展示より、建物外部に貼ってあるブルーのタイルがとても美しい。中庭にはチャイハネがある。そこで熱いリング茶を飲んでゆっくり休んだ。深い緑におおわれて古い遺跡からの出土品が無造作に並んでいるチャイハネにいと、さっきの守衛のことと思ひあわせて、ああここはトルコなんだ、とうなづいてしまった。

■ 観光スポット (二) イスタンブール大学



イスタンブール大学正門

外国のいろんな所へ行ってほとんど観光客が行かない観光スポットが大学という施設だ。この地でもやはりイスタンブール大学がある。そしてこれは騒々しいイスタンブールの中心にありながら、静かで安全な区域だ。イスタンブール大学がどんな大学なのか全然理解していないのだが、とにかく学問をする所なのでそのたたずまいを見るだけで、都市の心臓部に触れられるのではと期待しながら行った。ところが入り口の警備がとても厳しくて、一人一人チェックしている。これはとても入れないだろうかと思っていたが、なにも言われずに通してくれた。この時の服装は半袖の柄ものカッターシャツ（ネクタイはなし）と皮の鞆を持っていた。門衛は多分大学の関係者と思ったのだろう。中は静かな森になっており、いたる所にベンチがある。高い塔（ベアジットタワー）と本館の他は小さなセミナー室が並んでいた。生協で大学グッズを買いたかったのだが、どこにあるのかわからなかった。そもそも生協というものがないのだろうか。でも一人でゆっくりと時間を過ごすことができ、お節介な人にも出会わなかった。

この大学の正門は立派である。正門を出たところがベヤジット広場で、この正門を境として全然別の二つの世界があるようだ。ベヤジット広場の片隅に本屋街があって、イスラム教関係の本やコンピューター関係の本などが並んでいた。また広場と反対側の裏通りが学生の通学路らしく、両側の店舗を覗くと学生達が四人一組となって真剣に麻雀のようなゲームをしている。学生街はいつでも同じだ。

■ 観光スポット (三) 新市街とガラタタワー

イスタンブールの観光はほとんど旧市街に集中している。金角湾で分断された旧市街と新市街を結ぶのはガラタ橋とアタチュルク橋の二ヶ所だ。新市街といってもそれは比較の話で、新市街は十五世紀から十六世紀にかけて（オスマントルコの都として）造られたものである。但しこちらは旧市街とちがってあまり遺跡はないと見えて近代的なビルもけっこうある。大きなホテルも多く、I A S Sの会議があつ

たヒルトンも新市街のタキシム地区にある。旧市街からガラタ橋を渡って少し坂を上った辺りがガラタ地区でその中心にガラタタワーがある。昔の要塞のような格好のへんてこりんな塔だ。イタリアで見たような形をしていた。ここからの夜景がすばらしいのである。頂部はナイトクラブになっていて、ベリーダンスを中心としたナイトショーが連日行われている。ある晩、食事の後にここへやってきた。もう10時はまわっていたが、最後のショータイムに間に合った。ショーの始まる前にバルコニーに出て360度の展望を楽しんだ。いろんなモスクがライトアップしてあって美しい。アジアサイドの住宅街も灯がともっていて、ため息が出そうな眺めだった。



ガラタ地区

さてショーの方だがベリーダンスといってもあまり盛り上がりがないショーだった。舞台に一番近い所に座っていたので、ときどきダンサーが寄ってきて何やら声をかけてくれたがいささか眠たくもあった。ところが0時を過ぎた頃からがぜん目が冴えてきたのだ。それは歌謡ショーが始まったからである。50才くらいの男性歌手が出てきてから、舞台と客席はすごく盛り上がった。とても声のよい歌手で、エンタテイナーとはこういう人のことをいう。歌を歌っては各テーブル毎に声をかける。「どこからきたの？」すると客は自分の国名をいう。イタリア、ドイツ、カナダ、モロッコ、日本がこの日の客の国だった。ドイツ人が二十人くらいの団体だったが、その他は数名のグループだった。そしてそれぞれの国のヒット曲をその国の言葉で歌うのだ。日本の歌は「上を向いて歩こう」だった。舞台に近いせいで、ぼくはマイクを向けられほとんど一人で歌ってしまった。もうかなり酔っていたので恥ずかしくはなかったが、イスタンブールまで来て生オケを歌うとは思わなかった。その後歌手が僕に舞台へ上がれと言う。そしてイタリアから来たというすごいグラマーの女性客と一緒に舞台上で踊るはめになったのだ。イタリア人なんか全然照れがなく乗りがよい。ベリーダンスのような艶かしい踊りを二人で一緒にしばし踊って、客席の喝采を浴びた時は僕も半分得意になっていたから、あの歌手にはうまく乗せられたわけだ。

■ 観光スポット (四) 城壁

旧市街西端まで市電に乗って出かけた。コンスタンチノーブル時代に築かれた城壁が残っているのだが、半分以上くずれかけ荒れていながら今でも連綿と連なって存在している。それでもオスマントルコの占領以来500年以上、市域の境界としての役割をはたしてきたのだ。城壁より西側は農地になっている。城壁の付近は農民の住宅が多い。そして浮浪者があちこちで住居として城壁を使っているようだ。途中羊の群れにも出会った。こんな所には観光客は来ない。城壁に沿って一時間ぐらい歩いて、どこかで城壁の上に上がろうとしたがそんな階段などなかった。カーリエ門の近くで、崩れかけたところから上まで上がって旧市街を見渡した。この展望は写真では見たことがない。地中海地方特有の赤い屋

根屋根には起伏があつて、いくつかの頂点には必ずモスクがあつた。そして、ここは確かにアジアでもなくヨーロッパでもない、不思議な街であると思つたのだ。



城壁の外側とカーリエ門近くからの眺め

■ ボスフォラス海峡とアジアサイド

イスタンブール最後の日の朝、ボスフォラス海峡沿いの海岸でスケッチをしていた。ヒルトンホテルからすぐのところだ。ここは船の通行がはげしい。軍艦も通るが通勤のためのフェリーが多い。アジアサイドからヨーロッパサイドの新市街へ働きに出るのだ。遠くの方にトプカピ宮殿が見える。トプカピはマルマラ海とボスフォラスと金角湾のすべての接点に建っている。

ここからボスフォラス海峡の向こうのアジアサイドを眺めていると世界の中心部にいるような気がする。学校で習った世界史に、いろんな時代で登場する所である。やけに感傷的な気分になってしまう。今までたくさんの人がイスタンブールのこの地を訪れて、どんなことを思っただろう？

観光で歩き回ることになって、誰にもじゃまされずにボーッと海を見ていたかった。曇空だったが雨の心配はなかった。一時間ぐらい海岸に座り込んで景色を眺めたり、スケッチを続けたりしていると、イスタンブールではそんなわがままを許してはもらえないことがここでも実証された。海軍の兵隊が数名寄ってきて、何やらいいかげつた様子だ。ぼくはゆっくりと彼らの方を向いた。するとそのうちの一人が微笑みながら、“Very nice”と言って、仲間うちでいろいろ話を始めた。彼らは暇そうだったので悪い予感がして来た。ぼくはもう離れなければならない時間であることに気づいて、早々に彼らに別れを告げた。だからこのスケッチも中途半端のままで、イスタンブールへの旅は終わった。



アジアサイドとヨーロッパサイド

(おわり)